



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	日本語を母語とする特異的言語発達障害児の言語特徴(論文要旨)
Author(s)	村尾, 愛美
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/145677
Publisher	
Rights	

氏 名 : 村尾 愛美
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 268 号
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士

学位論文名 : 日本語を母語とする特異的言語発達障害児の言語特徴

論文審査委員 : (主査) 教授 伊藤 友彦
(副査) 教授 北島 善夫 教授 澤 隆史
教授 鈴木 猛 教授 葉石 光一

学位論文要旨

特異的言語発達障害 (specific language impairment: 以下 SLI) は、聴覚障害、非言語性知能の低さ、神経学的異常などの要因が明らかでないにもかかわらず、言語能力に著しい制約を示す障害と定義されている。SLI 児の早期発見と効果的な支援のためには、SLI の正確な理解が必要となる。しかし、我が国における SLI 研究は欧米に比して著しく遅れており、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴が何であるかはまだ明らかになっていない。教育現場においては、SLI そのものが知られておらず、SLI 児に対する配慮もほとんどなされていない。したがって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることが我が国の教育および研究上、極めて重要な研究課題となっている。本論文は、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにしようとしたものである。

第 1 章では従来の研究を概観し、本研究の目的を述べた。まず、研究の意義として、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることが教育、臨床上、不可欠であるだけでなく、SLI の普遍的な言語特徴を解明する上で重要であると述べた。次に、これまでの研究によって、日本語を母語とする SLI 児が格助詞、時制、アスペクト、受動文に困難を示すことが示唆されていること、SLI 児の言語の問題は持続するといわれていることを指摘した。さらに、日本語を対象とした SLI 研究のほとんどは少数例を対象としたものであり、多数例を対象とした研究が必要であると述べた。以上を踏まえ、本研究では、日本語を母語とする SLI 児を対象として、1) 格助詞、時制、アスペクト、受動文に視点を当て、2) 2 例の約 10 年にわたる縦断研究と、3) 多数例を対象とした横断研究によって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることを目的とした。

第 2 章では SLI 児 2 例の約 10 年にわたる自然発話データの検討を行った。第 1 節では自然発話における誤用の全体的な特徴を検討した。その結果、形態論的・統語論的誤用の割合が語彙や談話の誤用に比して高く、形態論的・統語論的誤用の中では格助詞の誤用の割合が高いことが明らかになった。そこで、第 2 節では格助詞の誤用について詳しく検討した。第 1 項では格助詞の

誤用の特徴を構造格と内在格という枠組みを用いて検討した。その結果、構造格の格助詞の位置での誤用が多く観察された。第 2 項ではデータ収集開始期と終了期の格助詞の誤用率を比較することによって、格助詞の誤用の持続性について検討した。その結果、格助詞の誤用は減少するものの、困難さが持続する傾向にあることが明らかになった。第 3 節では時制、アスペクト、受動文の誤用について検討した。第 1 項では時制、第 2 項ではアスペクト、第 3 項では受動文について検討した。その結果、時制、アスペクトは誤用率が低く、収集開始期と終了期間に明確な差は認められなかった。受動文についても使用数そのものが少なかったため、開始期と終了期間に明確な差は観察されなかった。

第 3 章では第 2 章の結果を踏まえ、格助詞に視点を当て、SLI 児多数例を対象とした実験的検討を行った。第 1 節では自然発話における格助詞の誤用率と実験課題における格助詞の誤用率を比較した。その結果、自然発話の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低いことが明らかになった。第 2 節では格助詞の誤用に及ぼす語順と態の影響を検討した。その結果、SLI 児の格助詞挿入課題の成績は、語順の影響を強く受けることが明らかになった。

第 4 章は総合考察である。本研究の結果から、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴として、以下の 5 点を提案した。1) 形態論的・統語論的側面の困難さをもつ、2) 形態論的・統語論的側面の中では格助詞の使用が最も困難である、3) 構造格の格助詞の使用のほうが内在格の格助詞の使用よりも困難である、4) 格助詞の使用の困難さは持続する、5) 自然発話における格助詞の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低い。この 5 点について、英語など日本語以外の言語に関する従来の結果と比較し、共通点と相違点について考察を加えた。最後に、上記の日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の教育、臨床への応用可能性について述べた。